

象徴天皇制における政治と倫理

—和辻哲郎と尾高朝雄の国体論争をめぐって—

日本女子大学 田中久文

今年、天皇の代替わりもあり、改めて「象徴天皇制」とは何かが議論されている。やはり論点となるのは、「象徴天皇制」と民主主義とが両立しうるのかという問題であろう。

実は、日本国憲法の制定の際に、そうした問題をめぐって二つの重要な論争が起こった。一つは和辻哲郎と佐々木惣一、もう一つは尾高朝雄と宮沢俊義によるものである。二つの論争は、ともに新憲法の掲げる「象徴天皇制」が、従来の「国体」を維持したものであるのかをめぐっている。この「国体」という概念は、今回のテーマである政治と倫理との関わりを考えようとするとき、近代日本において最も重要なものの一つであろう。

この二つの論争において、和辻、尾高は新憲法においても「国体」は護持されたとし、しかもそれは国民主権の原則と矛盾するものではないと主張した。彼らは新憲法制定の手続きの正当性（背後にGHQの強制がなかったかという問題）にはあえて触れずに、新憲法を所与のものとして受けとめ、天皇制と民主主義との融和をはかろうとした（立場こそ違え、戦後のいわゆる革新陣営の多くも民主主義を掲げる新憲法の前案が、GHQにより非民主的な手続きのなかで提示されたことに正面から向き合っていなかったのではなかろうか）。

こうした和辻、尾高に対して、佐々木、宮沢は新憲法の掲げる国民主権によって「国体」は明らかに変更されたとする。ただし、そのことに対する評価が両者は正反対であった。佐々木は「国体」変更を不必要であったとする。敗戦の原因は明治憲法そのものにあるのではなく、天皇への協力機関が責務を果たさなかったことにあるのであり、ポツダム宣言も「国体」変更を要求するものではなかったとして、新憲法に反対した（ただし、佐々木は決して守旧的な思想家ではなく、「立憲主義」

を説いた、大大デモクラシーの理論的指導者であったことには注意しておかなければならない)。同様な理由から美濃部達吉や南原繁も新憲法に反対している。一方、宮沢はポツダム宣言を受諾したとき、天皇主権から国民主権へと変わったのであり、それは一つの革命ともいえる事態であったとする、有名な「八月革命説」を唱えた(ただし、宮沢は当初「国体」護持を考えていながら、GHQ案を密かに入手してから「変節」したことには多くの批判がある)。

また、和辻、尾高と佐々木、宮沢とは論争の範囲に関しても相違がみられる。佐々木、宮沢は憲法論争である限り、議論を純粹に政治の問題に限定すべきだとした。それに対して、和辻、尾高は「国体」について論じる以上、政治ばかりでなく倫理にも触れざるをえないとした。ただし、その場合の彼らのいう倫理とは、『国体の本義』に代表されるような、「神勅」や「万世一系」に基づくものではなく、新憲法の唱える民主主義の理論的根拠となるべきものであった。その際、二人が共通して参照したのは、ルソーの「全体意志」という概念であった。「全体意志」を国民の総意と考えれば、それは現実の政治の世界では達成できない倫理的概念ともいえるものとなる。和辻はそれを「政治的な統一」より根底的な、すでに古来より実現されている「文化的な統一」と考えたし、尾高はそれを現実政治の多数決原理を超えた、絶対的な「正しさ」という到達不可能な永遠の理念と考えた(特に尾高は、人間が最終的な力をもつ従来の「主権」論を批判し、「ノモス主権」論を説いた)。そして、そうした「全体意志」の「象徴」が天皇であるとしたのである。したがって、天皇はすべての政治の根底に位置しながらも、政治に直接関わることのない倫理的な存在とされた。彼らが共通して、天皇は伝統的に不親政の立場にあったとし、新憲法の掲げる天皇の政治不介入の原則を受け容れたのもそのためである。

天皇が「象徴」する、こうした「全体意志」とは、個人の利益を追求する「特殊意志」を超えたものであり、「慈愛」や「正義」といった普遍的な理念に基づくものといえる。したがって、天皇は単に国民共同体の「象徴」であるばかりでなく、それを超えた普遍的な理念の「象徴」

でもあるとされる。そのことは、三種の神器が「正直」「慈愛」「正義」といった聖徳を「象徴」という伝統的な考え方に表れているとする。

以上紹介した二つの論争の中心となった和辻と尾高とは、ともにその思想形成においてハイデガー哲学から深い影響を受けている。かつて丸山眞男は、『古事記』にみられる「つぎつぎになりゆくいきほひ」という生成的自然観が、子孫の絶えざる発展を意味する「万世一系」という考え方の根底にあるとした。それを受けて、木田元はそこにハイデガー哲学との親近性を指摘した。しかし、和辻、尾高は、そうした「万世一系」を強調することなく、普遍的理念をも含み込んだ意味での「無」の「象徴」として天皇をとらえている。そこにハイデガー哲学との何らかの関連を考えることはできるのであろうか。